

渡辺先生の思いで

山 本 忠

私が高校生の頃、東京オリンピックの工事が盛んで東京中をひっくり返したようにどこに行っても工事中であった。これに伴い、各所で、交通渋滞はひどく、何とかせねばという思いと、都市の作り方に対する疑問、興味から、大学では都市構造の勉強をしたいと考えるようになった。そこで、高校の先輩の薦めもあって、都立大学の地理学科に入学した。

大学に入学して、学びたいことが沢山あり、出来、不出来は別として知識欲は旺盛であった。2年生の頃から、国土及び都市計画、都市財政や都市社会学等の他学部の講義も積極的に聴きにいった。

3年生になって、渡辺先生の「都市地理学」の講義を聴いたのが先生との最初の出会いでした。4年生になると、卒業論文の指導教官が渡辺先生に決まり、研究室に頻繁に出入りするようになって、先生のご指導を受け、公私共におつき合いさせていただくこととなった。今思えば、私の強い手を焼く学生だったのではないかと思われる。当時、先生は武蔵小杉に住んでおられ、時々お邪魔をしては、奥様にご馳走になったりもした。先生の風貌の如く、大学内でも、家庭でも全く変わらず、お酒はほとんど嗜まなかったが、片時もタバコを切らさなかったことはよく覚えている。

私の卒業論文はインナーシティ人口の減少の構造についてであったが、静岡県内の各都市の字別人口変動を整理し、モデル調査都市として、島田市の駅前地域を詳細に調査をし、当該地域の人口減少の原因を明らかにしたものであった。この調査に当たって、渡辺先生にも島田市役所に一緒に行ってもらったことがあった。先生は背広姿に年代物のかかなり古いリュックサック姿で市役所を訪れたために、職員の方が大学の先生と気づかず、私が、必死に市の職員の方に先生を紹介した記憶がある。何事にもマイペースであり、他人や周りに動じない先生の一面でもあったように思う。

また、卒業論文の原稿が概ね出来上がったので、

先生に届けると、暮れのお忙しい時期にもかかわらず、即座に原稿を読んで下さった。しかし、私の原稿は自分が知っていることはほとんど書かず、自分が調査研究で知り得たことや、発見したことだけを箇条書きのように短く書いたものだったために、これでは論文を読んだ人に不親切であるとお叱りをいただいた。実際、先生が指導教官を始められて以来の短い原稿であった。それでも、先生は徐に鉛筆を取り出し、文の意味を確認しながら、原稿の縦、横の空白部分に隙間なく加筆して下さり、論文の体裁、論文の書き方を一から指導して下さい。文章を書くのが苦手な私の論文も、ようやく20頁になり、無事に審査を通過して、学士を取得することが出来た。

その後、大学院に進み、中野教授、渡辺助教授のもとで、都市地理学を勉強することとなった。

私は当時の東京の街を何とかしたいという気持が強く、工学部建築学科の高見沢先生の研究室にも出入りさせていただくようになり、都市計画の勉強をするようになった。地理学、建築学、社会学等、いろいろな角度から都市について考え、見つめることが出来る基礎をこの大学院時代に培ったように思う。

この頃、渡辺先生のお宅は大学のすぐ近くにあったために、よく遊びにいった。ご趣味の海釣りの獲物をご馳走になったりもした。大魚の釣果の時などは、わざわざ自宅に電話を下さったり、急いで、いただきに伺ったりしたものだった。

先生、ご子息と大学の友人達と共に山中湖へワカサギ釣りに出かけたことが一度だけであった。私は初めての釣りで、要領がわからず、極寒の氷上でひたすら穴に糸を垂らしているだけだった。そばにいらっしゃる先生は無言で次々と何匹も釣っておられた。隣にいるのに何故一匹も釣れないのか、しびれを切らして先生にワカサギ釣りの方法を教示願うと、まずワカサギの習性の講義が始まり、その後釣れない原因として糸を垂らす深さであることを教えていただいた。結果、私も数

匹のワカサギを釣ることができたのであった。勿論、先生は何十匹ものワカサギをゲットされていた。

先生は常にこちらから行動を起こし、下手でも、間違っている自分なりの意見を言わない限り、答えが貰えない方でいらした。これは遊びでも、大学の研究でも変わることなく、教育者として、自分の主体性を持って扉を叩く者には、いつでも手を差し延べて下さる方であった。私は図々しくも、数々の疑問を投げかけたおかげで、先生の幾多の貴重なアドバイスを得ることが出来たのであった。

私は大学院時代、渡辺先生から都市構造の研究で著名なクリスラーの「中心地理論」を学んでいた。当時、私はゴットマンの「メガロポリス」やドキシアデスの「エキュメノポリス」にも興味を持っていたので、中心地理論との違いで、先生によく議論を吹っかけては討論したものであった。

その後、学部時代に調査に通った静岡県の都市構造の分析を始め、修士論文へと発展させて研究を続けていった。静岡県の都市は海と山に挟まれた細長い地域に立地しており、中心地理論にでくる六角形の都市構造とは異なる線状構造をし、横に成長を続ける都市空間であった。特に各都市間の人の移動が多く、かつ、静岡市や浜松市のような大きな都市への移動と、逆に大きな都市から周辺の小さな都市への移動も多いことに着目し、東海道線沿いの都市全てについての人の移動を調査した。その結果、静岡県内の東海道線に沿った都市の連担を「中間都市」と名付けて原稿をまとめた。この時先生から新たな概念の言葉を使うときの学術的言葉の定義の厳密さについて厳しく指導を受けた事が記憶に焼き付いている。それ程、自分の言葉や論文に対しての、考えが甘かったことを痛感したからである。今でも先生のご指導のありがたさを身にしみて感じている。

また、先生はご自身の中心地理論と異なる、私の間接都市論についても充分な意見交換の後、理解を示して下さい、以降私の考えをいかに論文にまとめあげるか、いろいろのアドバイスを下さり、力を注いでくださったのである。12月末に先生のお宅に原稿を持参すると、原稿を読みながら、次々と質問をなさり、答えを聞きながら、文章下手で、

言葉足らずの部分を全て補正して下さい、どうか論文としての形が出来上がったのである。

正月休みに論文を清書し、提出をしたのであったが、論文審査が終わっても、渡辺先生から合格の言葉はもらえず、内心不安であったが、当時教授でいらした中野尊正先生から、「今夜一杯いこう」とのお誘いがあり、都立大学駅下の焼鳥屋で、中野先生、渡辺先生お二人から「合格」の知らせをいただいたのであった。中野先生の「おめでとう」という乾杯の発声をいただき、やっと合格した実感をおいしいビールで味わったのであった。渡辺先生も飲めないお酒を私のためにおつき合い下さり、この時の三人で呑んだビールは、今でも印象深く心に残っている。そして何よりも、意見の異なる私の論文を認めてくださったことがうれしく、私のその後のステップへの励みと自信につながったように思われる。

こうして、大学院修士課程を無事修了して社会人としてのスタートを切ったのである。ところが(財)日本不動産研究所に入所後も、大学の近くに自宅があったことや、土、日が休日だったこともあって、先生の研究室に立ち寄っては仕事上の相談にも良くのっていただいたものだった。

ある時、先生が大学院生を連れて、事務所を尋ねてこられたことがあった。てっきり土地価格等のデータ収集と思いこんでいたが、話をしている内に院生と先生の考え方の差があり、研究がまとまらないとのことであった。先生は論文としての限界を心配されていたが、私も協力して院生のアドバイザーとなるので、最後にはハンコを押して下さるように頼んでみた。先生もお帰りになれる時にはすっきりした表情をなさっていたので、私同様に手間のかかる院生で、似たもの同士で相談相手になってやってくれとの主旨に先生のご心労をつくづく感じたのであった。その後、その院生も立派な論文をまとめ上げ、無事に大学院を修了した。先生にいつもお世話にばかりになっていた自分が、まさか先生に助力できることがあったとは思わなかったので、内心うれしく思った。

その後、年と共に仕事が多忙を極め、大学や先生とお会いする機会もめっきり減っていった。

先生が病気で倒られたことも知らず、訃報の連絡を受けた時は大きなショックだった。

お通夜に駆けつけ、翌日の告別式には教え子代

表で、追悼の文を読ませていただいた。生前、せめて病院入院中にお見舞いにお見えなかったことが何とも心残りでもあり、追悼文の任務を終えたこともあって、一種の虚脱感に陥った程であった。

先生が亡くなられて間もなく、私は“夢の休煙”を決意した。先生同様、私もヘビースモーカーで当時パイプタバコを吸っていた。40歳の12月31日をもって始めた休煙は、“禁煙”や“断煙”でなく“休煙”なのだからという気分的ゆとりによって、今でもなお続いているのであるが、私に“休煙”の絶好のタイミングを下さったものであると今では感謝している。

私も、昔抱いていた博士論文を書く夢もだんだんと遠のいてしまったが、仕事のベースとしていつも根をはっていたのは、大学時代から学んだ「都市地理学」であり、これを活用、応用して、不動

産に関する調査やコンサルティングの仕事をこなしてきたと自負している。ひとえに渡辺先生、都立大学の教授陣、諸先輩のご指導があつてからと深く感謝している。

そして平成10年度からは学内ではなく、在野の立場から地理学がいかに利用されているかを講義するため、非常勤講師として、渡辺先生から学んだ都市の構造論を使った実証分析を、今までに行った仕事の現場を交えて後輩学生に講義できることは渡辺先生に小さいながらも恩返しができるように思え、私自身とてもうれしいことである。恩師としての、渡辺先生の蒔かれた種が、何時までも都立大学の地理学教室に受け継がれていくことを願ってやまない。

(財)日本不動産研究所研究部)